

スズカケソウ *Calorhabdos villosa* Makino

現在の所他に自生地はみいだされていない。尙例年夏になると藪の下草を刈取るためか年々減少していく様に感じている。(岐阜県立不破高等学校)

附記 (山崎 敬) Takashi YAMAZAKI: Additional note

スズカケソウは飲沼慾齋の作つた標本が国立科学博物館に藏されており、その立派な図が草本図説にのせられているなど、本草学者にはよく知られていたものらしいにもかかわらず、自生地は勿論、生品さえ容易にみられなかつた。明治29年、牧野先生が生品にもとづいて新種の記載をされて以後も、実物に接した人は皆無であつたし、標本すらも殆んど存在していなかつたものである。昭和7年波磨氏によつて自生地の発見が公にされたことは上記のとうりであるが、その研究が配布範囲の狭い地方誌にしか発表されなかつたため、昭和10年大井博士が植物分類地理に書かれた簡単な記事以外には、詳細なことは一般に知られず、波磨氏の死去と共に不明になつてしまつた。最近岐阜薬大の原田利一氏や武田製薬の富樫誠氏などの努力により、再び自生地が明らかにされ、発見者の室氏も健在であることがわかつたのは喜ばしい。

生育地でスズカケソウが特に保護されているような形跡はなく、全くの野生状態である。この竹藪から2米位の道をへだてて同じ様な竹藪があるが、そこにはスズカケソウは全くみられない。これはスズカケソウの繁殖が種子よりも幼苗によることと関係する

のであろうが、このことは一方の竹藪にスズカケソウが植えられて野生化したのではないかという疑問を起させる。岐阜・大垣地方には似た様な状態の竹藪が非常に多く、今後スズカケソウの生育地の発見される可能性があるが、それまでは前記のものが本来の自生が、野生化したものかはきめられない。

スズカケソウ属は東亜にのみ限られ現在15種ほど知られているが、中でもスズカケソウは花序が球形なことや、全体密に毛がはえている点など、他に類のない特殊な種類である。強いて似たものを求めれば、雲南にある *Calorhabs yunnanensis* であるが、これとても全く異つたものである。尾張の本草学者によく知られていたこと、牧野先生が入手された生品も名古屋の人から送られたものであり、上記の生育地の発見など中京地方に非常に関係の深い植物である。ハナヂオウにみられるように、昔支那から渡来してきて、まだ自生地不明なものと考えより、もともと中京地方に自生していたと考える方が妥当のようである。

スズカケソウ属、クガイソウ属、クワガタソウ属は互いに近い関係にある群であるが果実や種子のできかたなどからみると、スズカケソウ属が原始的な形態を最も多く保持している。キノクニスズカケ、リュウキユウスズカケ、タカサゴトラノオなど隔離分布しているものが多く、各種類間の差もはつきりしており、同一種内での形態的変化も殆んどない、又種類の多くが四川・雲南やその周辺に限られているなど、衰滅しつつある過去の群であると考えられる。スズカケソウもその残存植物の一つであろう。元来中京地方にはハナノキ、ヒトツバタゴ、シデコブシ、エンシユウシヤクナゲ、ミカワバイケイソウ、ミカワシオガマなど特殊な植物が多い。スズカケソウもこの一群に属するものと思われるが、これらの植物は日本列島に於ける植物相の形成過程を明らかにするために、貴重ながかりを与えるものであり、スズカケソウの生育地の発見はこの意味でも重要な意義をもつ。

スズカケソウは生育地でも減少しつつあるといわれる。しかしこれは非常に丈夫な植物で移植が容易である。又取木も簡単に莖を地にはわせて所々に土をかけておくと、多くの苗が得られる。岐阜・大垣地方の竹藪に移植してやれば繁殖させることは容易と思う。又そうして各所に保存しておくことが最良の保護策であろう。ただ一つ注意しなければならないのは、この類の繁殖は種子よりも、主として莖にできる幼苗にたよっている点である。成長した莖が地にふれないと、そのまま枯死してしまつて繁殖しえない、雑草をとつてやつて莖が地に接するようにしてやらないと絶滅する恐れがある。東京にある白金の教育自然園で、徳川時代から保存されてきたトラノオスズカケが、戦後園の人々の努力にもかかわらず絶滅にひんしているのも、この点の注意に欠けているからであろう。なお小竹維一氏によつて画かれた、生育地の案内図が東大標本室に所蔵されている。(東京大学理学部植物学教室)